

# 小学生による映像制作と能力開発の関係性

若狭高浜子ども放送局の事例を中心に

松 野 良 一

## How Teaching Video Production Develops Other Skills in Elementary School Children;

A Case Study: Children's 'Making TV Program' Project  
in Wakasa Takahama, Fukui Prefecture

Ryoichi MATSUNO

### Abstract

That media literacy can be developed in children by teaching video production skills has already been documented. In this paper, the author claims that teaching video production techniques develops a much wider range of abilities in children, including important social skills. The elementary school children involved with the 'Making TV Program' project in Wakasa Takahama, Fukui Prefecture, became better communicators, were able to work more cooperatively with each other, and could articulate goals and methods more clearly. It wasn't just the elementary school children who benefited from this project: The university students who mentored and supported the children in this project were shown to have developed a better appreciation of the emotional impact that video can have on audiences, superior analytical abilities, clearer communication skills, more effective teaching techniques, better people management skills and a much improved ability to concentrate in the presence of loud and insistent distractions.

### Key Words

Media Literacy, Video Production, 'Making TV Program' project in Wakasa Takahama, Social Skill, Communication Skills, Ability Development

- 2.1 「若狭高浜子ども放送局」とは
- 2.2 活動スケジュール
- 2.3 活動の具体的内容と想定される教育的効果
3. 結果（小学生および大学生の変化）
  - 3.1 小学生の行動変容、態度変容
  - 3.2 大学生の意識変化
4. 小学生、若狭高浜観光協会、保護者の感想
  - 4.1 参加した小学生の感想
  - 4.2 若狭高浜観光協会関係者の感想
5. 考 察

### 目 次

1. 本論文の問題と目的
2. 方 法

## 1. 本論文の問題と目的

映像制作活動と能力開発の関係性は、これまでメディアリテラシーとの関係で論じられることが多かった。総務省の定義によればメディアリテラシーは、次の3要素から構成される<sup>1)</sup>。メディアを主体的に読み解く能力、メディアにアクセスし、活用する能力、メディアを通じコミュニケーションする能力である。これまで、映像制作活動は、この3要素のうち、情報の読み手との相互作用的（インタラクティブ）コミュニケーション能力を向上させる上で、有効に働くのではないかという指摘を行ってきた<sup>2)</sup>。

しかし、その後、筆者の研究室で、小中学生や大学生に映像制作活動をやってもらい、教育的効果や能力開発に注目してデータ分析を行ってきたところ、メディアリテラシーに関連する能力だけでなく、コミュニケーション能力や協調性などさまざまな能力が開発される可能性があることがわかってきた<sup>3)</sup>。つまり、映像作品を企画して、制作、上映するまでの一連のプロセスの中に、多様な能力開発のプログラムが内包されていると考えられるのである<sup>4)</sup>。

しかし残念ながら、学校や地域における児童による映像制作については、散発的には試みられてきているが、国内では数えるほどしかない。このため、映像制作と児童の能力開発に関する研究も、ほとんどない状態である。実際に行われて来た映像制作教育は、場所も種類もレベルもさまざまで、モデル化されたものは未だに見当たらない。これは、これまで映像機器が高価だったことや、映像制作を教えることができる教師が少ないこと、さらには公教育のカリキュラムに取り入れることが難しいこと、教育現場に映像制作活動を導入することに対する理解が不足していること、などが背景にあると思われる<sup>5)</sup>。

しかし、最近では、散発的に行われている映像制作活動について、ネットワークを作り経験を共有しようという取り組みが行われるようになった。2011年10月には、埼玉県川口市で、第1回

「映像学習プログラムシンポジウム全国大会」が開催され、神奈川県、埼玉県、北海道、沖縄県、石川県、香川県における小学校の映像制作活動について、事例が紹介された<sup>6)</sup>。しかし、まだ研究的な手法を使った解析は、ほとんどない。

本論文は、福井県高浜町で2011年7月に行った小学生の映像制作活動と能力開発の関係性を明らかにしようと試みたものである。小学生たちが学校の外に出て、地域イベントや地元の老舗取材して映像制作活動を行った。その活動の前後において小学生がどう変化したかに関するデータを収集して解析したものである。さらに、映像制作活動に参加した小学生の能力開発だけでなく、ティーチングアシスタント（TA）として参加した大学生の意識変化と教育的効果についても解明することを目的とした。

つまり、小学生が学校の外に出て、大学生のサポートを受けながら地域に密着した映像作品を制作する。その活動の前後で、小学生たちにどういう成長（行動変容、態度変容）が見られるかを、大学生が観察法を用いてデータを収集しKJ法を使って解析を試みた。さらに、大学生自身が、小学生といっしょに活動していく中で、どういう意識的变化が自分の中で起きたのかについて回想法を用いてデータを収集しKJ法を使って解析を試みた。

## 2. 方法

### 2.1 「若狭高浜子ども放送局」とは

2003年7月、福井県高浜町の若狭高浜観光協会主催のイベント「漁火想」の開始と共に、高浜町役場、同町教育委員会の協力の下、同町立日引小学校、青郷小学校、高浜中学校の児童、生徒が参加して始まったプロジェクトである。児童、生徒への指導は、当初から中央大学松野良一研究室が担当している。2011年度は、中央大学FLPジャーナリズムプログラム松野良一ゼミの学生が担当した<sup>7)</sup>。

同観光協会から2003年度に、イベント「漁火想」についてドキュメンタリー制作の依頼があっ

たことがきっかけ。「地元の小学生がレポートしたほうが、より地域からの情報発信という意味が強められるのでは」と提言し、第1回から小学生が企画、撮影、レポート、編集を手がける方式を使用している。このプロジェクト自体を「若狭高浜子ども放送局」と名づけている<sup>8)</sup>。

小学生が地域の魅力を発見し発信するという「若狭高浜子ども放送局」は、教育目的のみならず、その土地の活性化にもつながり、「漁火想」が目指す「人の和によるまちづくり」と一致すると、観光協会、町役場、町教育委員会、小中学校関係者が賛同。2003年以降毎年、7月の「漁火想」の開催に合わせて行っており、2011年度で9年目。

参加した児童、生徒は、2003年度から2011年度まで約80名に上っている。完成した映像作品は地元のケーブルテレビだけでなく、首都圏の複数のケーブルテレビで放送され、Web上でも配信されている。また完成した作品は、DVDにパッケージされ、同町内の小学校、観光協会、役場などで上映会が行われている。

## 2.2 活動スケジュール

2011年度の「若狭高浜子ども放送局」は2班に分かれ、ケーブルテレビで放送すると同時に、Web配信するための映像作品を作ることが活動目的。参加した小学生は、高浜町立青郷小学校の児童8名（男子2名、女子6名）。

第1班（「漁火想」班）：福井県高浜町のお祭り「漁火想」を、児童がレポートする。会場内のスタッフや観光協会のスタッフ、来場者へのインタビューを中心に、祭の主要なイベントである水中花火、砂浜キャンドル、屋台の食べ物などをレポートする。高浜町立青郷小学校4年生の児童5名（男子2名、女子3名）が参加。

第2班（町班）：高浜町で、地元の郷土料理「サバ寿司」を75年間作り続けている水産加工品店をレポートする。サバ寿司職人へのインタビューだけでなく、子どもたち自身がサバ寿司作りを体験、試食し、レポートする。高浜町立青郷小学校5年生2名、6年生1名の計3名（全員女子）が参加。

2日間かけて、企画・撮影・編集・上映を行った。活動スケジュールは表1の通りである。

## 2.3 活動の具体的内容と想定される教育的効果

### 2.3.1 講習会

大学生（TA）と小学生が初対面。互いに自己紹介した後、約1時間かけて講習会、企画会議を行った。今回参加した小学生8名は全員、子ども放送局に参加するのは初めてだった。そのため、最初に昨年度制作した「若狭高浜子ども放送局」の番組を視聴してもらった。口頭で説明するより、

表1 活動スケジュール（2011年）

7月21日	大学生（TA）が夜行バスにて東京出発
7月22日	高浜到着 ロケーションハンティング、観光協会との打ち合わせ（以下小学生と一緒に活動）
7月23日	講習会 小学生にレポートの要点、カメラの使い方などを指導 企画会議 小学生とインタビュー、レポート内容を考える 撮影本番 2班（「漁火想」班、町班）に分かれ、映像制作活動
7月24日	編集 TAが指導をし、小学生と一緒に編集 発表準備 上映会の舞台挨拶を練習 上映会 保護者、観光協会、地域の方を交えた上映会 TA帰京

同世代の子どもが元気にレポートしている姿を見せる方が、子どものモチベーション向上にもつながると考えた。さらに、小学生にとっては、映像の方が行動をイメージしやすく、現場でのレポート方法などをモデリングしやすいため。

番組視聴後に、TA が小学生に番組制作の全体の流れやレポートについて説明した。視聴した番組を思い出しながら、レポートのコツや重要なことは何かについて小学生自身に考えてもらった。そして、番組制作上で大事なポイントを、各人に発表してもらった。

講習会では、カメラの使い方、撮影方法を学ぶとともに、実際にマイクを持ってレポートを練習した。カメラに向かってしゃべることは、大人でも緊張する。リハーサルを行うことで、カメラの前でしゃべる独特の緊張感に、小学生たちに慣れてもらう意味があった。

この場面では、カウンセリングで使用するアサーショントレーニングの方法論を活用した。



写真1 講習会でマイクを握ってレポートを練習する子どもたち。初めてのレポート練習に若干緊張気味である。TAは大学生である。

### 2.3.2 企画会議

企画会議では2班（「漁火想」班と町班）に分かれ、メンバーの誰が、どこで何をレポートするかを決めた。その後、ポストイットを使って一人一人が自分の質問項目を考える作業を行った。小学生たちが主体的に活動するためには、この企画会議で小学生と大学生が十分な意思疎通を行うことが重要である。また、質問項目を事前に準備し

内容を熟考しておくことは、取材先との信頼関係を築く上でも大事である。

このプロセスを踏むことによって、始めは恥ずかしくてなかなか意見を出さない小学生も、TAと一対一で会話をしながら考えていくうちに、自分のアイデアを素直に言葉に出せるようになっていく。



写真2 企画会議の様子。ポストイットを使って、TAの大学生とともに質問内容を考えていく。

### 2.3.3 撮影

「漁火想」班、町班の2班に分かれ、映像作品の制作活動を行った。レポートだけでなく、演出、撮影も、担当を交替しながら技法を学んだ。

小学生たちは、開始前は消極的で、企画会議での発言も少ない。初めてカメラの前で、他者にインタビューする時も、緊張し、声のトーンも低く、笑顔もこぼれている。しかし一度レポートを体験すると、「次のレポートはいつできるのか」「あのお客さんにインタビューがしたい」など、態度が意欲的な方向へ変化していく。緊張しながらも精一杯レポートし、相手がきちんとインタビューに答えてくれた場合、コミュニケーションを取ることの緊張が減少し楽しさが強化される。

またグループで行う撮影活動を通して、グループ内での自分の役割を意識し、管理できるようになる。初めは大学生が撮影担当、ディレクター担当などを指名するが、撮影を進めるうちに、子どもたちが率先して役割を自分たちで考え、指名しあいながら分担するという現象が生じる。グループで一つの

目標に向かって力を合わせる経験を通して、協調性を持ちながらも、自分の意見を主張する力を身につけるトレーニングになる。



写真3 撮影前に「おー！」と張り切る子どもたち。



写真4 「漁火想」会場にてインタビューする子どもたち。



写真5 雑観を撮影する小学生と、指導する大学生。

### 2.3.4 編集, 上映会

2日目の午前中は、大学生が小学生と協力して、映像の編集作業を行った。午後は保護者、若狭高浜観光協会、自治体関係者を招いて、上映会を行

った。

上映前、会場にたくさん集まったお客さんを前に、子どもたちは緊張する。上映前に舞台挨拶を必ず行うように設定してある。映像制作活動を通して頑張ったところ、楽しかったところ、VTRの見所などを一人一人が発表する。自分たちで考えたアクションを交えながら、「VTRどうぞ！」と声を揃えて進行する。毎回、上映会は笑いと感動に包まれる。普通の大人がやっても面白くないレポートも、小学生たちがやると面白い。言い間違いや戸惑い、間、失敗なども、それがかえて子どもらしさを表現することになって爆笑をさそう。上映前は緊張していた子どもも、爆笑と拍手に、大きな感動を感じる。自分たちの作った番組が、会場にいる人々を笑顔にすることができるということを体感することで、自己効力感が大きく上昇すると考えられる。

映像制作が他の活動と違う大きな点の1つは、



写真6 大学生の指導を受けながら編集する子どもたち。パソコンを使った作業に強い関心を示す。



写真7 上映前に舞台挨拶をする子どもたち。



写真8 上映会には多くの観客が集まった。



写真9 上映会の様子。笑い拍手の渦が起きる。

自分たちの努力が、目に見える形で表現されること。そして、自分たちの作品を多くの人が見て笑い、感動してくれるという場面を目撃する点であろう。画面の中で元気にレポートしたりインタビューしたりする自分の姿を見ることは、自己イメージのフィードバックにつながり、きちんとコミュニケーションが取れているという自覚にもつながる。

### 3. 結果（小学生および大学生の変化）

#### 3.1 小学生の行動変容、態度変容

プロジェクトの前後における小学生の変化を、TAを務めた大学生が観察してデータを収集し、それをKJ法を使って分析した。結果は表2の通りである。その結果、4つの要素が明らかになり、前後

表2 「若狭高浜子ども放送局」の活動前後における小学生の変化（大学生による観察法）

気づいた変化	具体的内容	教育的効果
コミュニケーション能力の向上	①初対面の人も相手の目を見て、生き生きと話ができるようになった。 ②大勢の前で発表することに対する抵抗が少なくなった。	カメラの前に立つことでスマイル&アイコンタクトを自然と行えるようになった。挨拶や言葉遣いの指導を受け、実際に大人に話しかける経験をしたことで、会話力や度胸が身についた。
協調性・積極性の向上	①撮影中自ら雑観を撮ろうと試みる、率先してメンバーをまとめる、お互いにアドバイスしあうなど、自分の役割を意識し、分担できるようになった。 ②元気にレポートする時、落ち着いて周りを見る時、集中して練習する時など、TPOに応じてテンションを変えることができるようになった。	チームで活動していく中で、一人一人が頑張る力を合わせる大切さを学ぶことができたと考えられる。今自分は何をすべきか、考えられるようになった。撮影、上映を通して自分に自信をつけるきっかけがあり、積極性の向上につながった。協調性・積極性の根底には、自己効力感の向上があると思われる。
発言・表現意欲の向上	①自分の思いを素直に言葉にするようになった。取材することへの楽しさを言葉にするようになった。 ②表現することに対して自分なりのこだわりを持つようになった。	どうすれば相手にうまく伝わるか、考えられるようになった。初対面の人も信頼関係を築きインタビューを交わす経験を通じて、誠意を持って接すれば相手は自分を受け入れてくれることを知った。言葉選びや表情などを工夫するようになった。
自己効力感の向上	①TAからほめられたり、上映会で拍手をもらうことで、再びインタビューをする意欲を示す。 ②最後のあいさつが自信あるものになる。次はもっと上手にできると語り、来年も参加したいと感想を残している。	インタビューは最初うまくできない、レポートも不安で声かふるえたりする。しかし途中から上手になりTAからほめられ強化される。上映会でもほめられ大きな自信となっていく。他者評価から自己肯定、そして自己効力感の向上へとつながっている。

において大きく変化していることがわかった。

実施日 2011年8月3日，中央大学学内  
質問 「若狭高浜子ども放送局の活動の前後  
で，小学生はどう変わったか」  
参加者 TAを担当した中央大学の大学生 女子  
5名，男子2名（計7名）

### 3.2 大学生の意識変化

プロジェクトの前後における大学生の意識変化  
についても，KJ法を使って分析した．場所，実  
施日，参加者は同じである．質問内容は「若狭高  
浜子ども放送局の活動の前後で，自分自身はどう  
変わったか」である．結果は表3の通り．6要素  
が明らかになり，前後で大きく変化したことが分  
かった．

表3 「若狭高浜子ども放送局」の活動前後における大学生の変化（大学生自身による回想法）

気づいた変化	具体的内容	教育的効果
笑顔でコミュニケーションする能力の向上	①自分たちが楽しんで活動しないと，子どもにも生き生きと活動してもらえないことを実感した． ②子どもたちに率先して話しかけるようになった．	子どもに笑顔でのびのびと活動してもらうには，心の壁を解き，子どもと早く打ち解けられる環境を作ることが重要である．誰かに楽しんでもらうためには，まずは自分が楽しむことが大切だと気づいた．
素直に考える姿勢の習得	①子どもに正当な理由を説明するため，常に「なぜ」を考えるようになった． ②素直で純粋な子どもたちを見て，子どもたちに信頼されるには素直でなければいけないことを実感した．	子どもとの心の距離を縮めるためには，子ども扱いするのではなく，一人の人間として真摯に向き合うことが大切だと学んだ．子どもたちは聞いたことを素直に受け止め，納得いかなければ素直に疑問を持つ．子どもに説明をするには，自分の中で曖昧にしていたことも，まずは「なぜ」なのか考えることが必要だと学んだ．
メリハリを付けて子どもを指導する能力の向上	①正しいことはほめ，注意すべきことは注意できるようになった． ②常に「なぜ」を考えられるようになっただけでなく，子どもにも「なぜ」を考えさせられるようになった．子どもの本心を導きだすことの大切さに気づいた．	子どもを指導し伸ばしていくためには，具体的にほめること，時にはきちんと注意することの両面が大切だと学んだ．
協調性の向上と達成感	①一つのチームとして，大学生や子どもたちをまとめることの楽しさと難しさを知った．	普段の大学生活では，一つの目標に向かい，皆で何かを全力でやり遂げる経験は少ない．意見が対立することや，子どもがなかなかまとまってくれないこともある中，どうすれば皆が納得して活動できるのか考える力がついた．また，チームで協力するからこそ，より大きな達成感を皆で感じる事ができた．
映像の影響に対する実感	①上映会で子どもも大人も笑顔になる姿を見て，映像が持つ力の大きさを実感した．	上映会を通して，多くの人の心に笑いや感動を与えられることがどんなに嬉しいことか，実感できた．
咄嗟の判断力と集中力の向上	①子どもがどう工夫をすれば良くなるか短い時間の中で真剣に考えている姿を見て，刺激を受けた． ②演出やスケジュール構成など，その場で即座に考え行動する要領を，少しずつ得ることができた．	短い時間で企画・撮影・編集・上映をこなさなければいけない環境において，短期集中で物事を判断していく精神が身についた．

プロジェクトが終了し解散する前に、参加した小学生たちと観光協会長、同事務局長に自由記述で感想を書いてもらった。大学生側の認知には出てこない小学生、観光協会関係者の捉え方を探索するためである。

#### 4. 小学生，若狭高浜観光協会，保護者の感想

##### 4.1 参加した小学生の感想

###### 4.1.1 「漁火想」班の感想

・大学生のみんなが優しくしてくれたので、楽しい2日間が過ごせました。インタビュー相手によって様々な質問を考えたところを頑張りました。私は高浜が大好きです。自然が豊かで海がきれいだし、人が優しいからです。

(小学4年女子)

・わざわざ遠くから来ている県外の人にもインタビューできたことが楽しかったです。また子ども放送局をやりたいです。理由は、リポートが楽しかったからです。次はもっと上手にリポートできるようにになりたいです。

(小学4年男子)

・最初はうまくインタビューできなかったけど、段々慣れてきて嬉しかったです。会長さんにインタビューした時、会長さんが明るく話していて楽しかったです。一番初めにインタビューする時が、特に難しかったです。見所は、一人一人が頑張ってリポートしているところと、水中花火がきれいなところです。

(小学4年女子)

・知らない人にインタビューするのは緊張したけど、初めて会う人でもインタビューしたら私に関心を持ってくれて答えてくれたので、楽しかったです。すぐに感想を言うために話を聞いている時に感想を考えるとところが難しかったです。

(小学4年女子)

・はじめてインタビューをしたけど、相手がちゃんと答えてくれて楽しかったです。沢山の人に

インタビューをして、1日中リポートしたことが大変でした。インタビューの時、マイクを相手に向けたり、自分の感想を言うのが難しかったです。

(小学4年男子)

###### 4.1.2 町班の感想

・編集で音楽を決めることが楽しかったです。難しかったことはサバ寿司を作るところです。初めて会う人にもインタビューができて嬉しかったです。美味しい食べ物がある高浜が大好きです。

(小学6年女子)

・音楽を決めたり、テロップを打つところを頑張りました。皆でサバ寿司を食べたことと、皆で協力してリポーターやディレクターをしたのが楽しかったです。サバ寿司の作り始めから完成までと、インタビューが見どころです。

(小学5年女子)

・インタビューとサバ寿司を握るところを頑張りました。あまり大きな声が出なかったから、来年はちゃんとリポートできるようにになりたいです。

(小学5年女子)

##### 4.2 若狭高浜観光協会関係者の感想

###### 4.2.1 若狭高浜観光協会会長 山本幸男さん

毎年思うことですが、2日間というわずか短期間の中で番組を作り上げる子どもたちの姿を見て「よくできたなー」と目頭が熱くなりました。胸が感動で一杯になる思いです。今年は東日本大震災があり「漁火想」自粛の声も挙がりましたが、「同じ海に面する町として、人々に癒し、励まし、感謝を届けたい」という思いで、例年と内容も若干変更して「漁火想」を開催しました。その中で、今年の「漁火想」を番組におさめてもらうことができ、特別な思いです。

素晴らしい番組ですから、もっと多くの高浜町内の学校や子ども会、教育委員会、PTAの方々などに見てほしいと思います。9年間も活動が続いてきたというのは大変なことです。2日間の活動や、学生と子ども達の関わりを見ていると「あり

がとう」で終わってしまうのは寂しい気がします。今後も何かしら前進させつつ、ずっと続けていきたい活動です。ありがとうございました。

#### 4.2.2 若狭高浜観光協会 白崎洋さん

「漁火想」班は、イベント準備段階から水中花火まで地元の人々と観光客の絡みが表現できており温かな作品でした。町班は、サバ寿司職人との掛け合いが多く、楽しく見ることができました。

「若狭高浜子ども放送局」も今年で9年目になります。過去の番組で、地元漁師の家に子どもたちが上がり込んで、最後に「漁師の後継者がいない」という言葉を引き出したものや、地元小学校の廃校を語ったものなど、今でも記憶に残っている作品が多々あります。

子どもたちの成長していく過程において、積極的に高浜町内外の人々と交流することは、大きな影響を与えています。特に、大学生の皆さんと過ごす十数時間は非常に大きな影響を与えているようです。過去に番組に出演した子どもたちも、活動のことを記憶にとどめています。またPTAからも、画面を通して見る子ども達の姿は、普段見ているものと異なるようで、例年大きな反響があります。今後も子ども放送局を継続していくことで、子どもの視点から高浜を見つめ、「漁火想」で目指す「人の和によるまちづくり」「高浜が好き」の推進を行っていきたいと思います。

## 5. 考 察

大学生の認知に関するKJ法の結果および子どもや観光協会関係者の感想を総合すると、「子ども放送局」というフレームを使って行う映像表現活動は、小学生たちに、大きな行動変容、態度変容をもたらすことがわかった。一連の映像制作活動が、心理的なトレーニングになっており、結果的に多様な能力を伸ばしていると思われる。

特に、自分の考えを生き生きと相手に伝えることができるようになること、皆で一つの番組を作り上げる過程の中で積極性や協調性が身につくこと、上映会で多くの人から拍手をもらうため自己効力感が向上することなどである。

初めは声が小さく、緊張して上手く話せない子どもも、一度、二度とりポートを重ねるうちに、相手の目を見て、大きな声で会話することができるようになる。そうしてでき上がった作品を多くの人々に見てもらい、直接的に拍手やフィードバックをもらえる経験は、子どもたちにとって大きな自信につながる事がわかった。

成長のスピードは一人一人違うといえども、2日間の活動で対人的なコミュニケーション能力、あるいは対人的インタラクションへの態度は、大きくポジティブ方向に変化することがわかった。

「はじめてインタビューしたけど、相手がちゃんと答えてくれて嬉しかった」という子どもの感想は、非常に印象的である。初対面の人にいきなりマイクを持って話しかけることは、誰でも緊張する。「相手は答えてくれるだろうか」「怒られるのではないだろうか」という不安を抱く。そして、一生懸命にインタビューをし、相手もそれに応じてくれた時に、人との会話の楽しさ、人間同士の信頼関係を、子どもながらに実感したと推測できる。

「人が優しいから高浜が好き」という子どもの感想からは、撮影や上映会を通して地域の人々と温かな交流を築いた経験によって、地域の魅力を再発見することにもつながったことがうかがわれる。そして、基本的な人間信頼が芽生え、自らのコミュニケーション能力を向上させることができたと思われる。

安心と安全は、地域社会での基本である。見知らぬ人や未知の危険については、十分に警戒する必要があることは言うまでもないことである。しかし、安心・安全を確かめるためにも、コミュニケーション能力は重要である。また、地域社会においては、信頼できるコミュニケーションとコミュニティの構築、助け合いの精神の復活は不可欠である。小学生たちがこれから成長していくにあたって、基本的なコミュニケーション能力を養うことは極めて重要である。

以上の小学生に関するデータ解析の結果をまとめると、図1のような関係になるとと思われる。企

画段階、撮影段階、編集段階、上映会段階（アウトプット段階）のそれぞれのプロセスで、様々な能力の開発が、段階的に進んでいくと思われる。

他の集団活動と違って、映像作品は制作された後に、上映会や実際のメディアによる放送や配信というアウトプットが行われる。これは、本人の努力の成果の、本人へのフィードバックでもある。この部分が、小学生自身の自己効力感を、飛躍的に向上させるのではないかとと思われる。

単純に、先生からほめられるだけでなく、自らの努力が見える形として表れ、それについて、周囲の大人や同年代の小学生が爆笑してくれたり拍手してくれたりする。それが、他の集団活動とは違って、極めて視覚的に、情緒的に、感動を体験できる。そして、このプロセスの循環によって、開発された能力やポジティブな行動がさらに強化されていくと考えられる。

また、子どもたちとの番組制作活動は、TAとして指導した大学生側にとっても大きな成長のきっかけになることがわかった。

解析の結果、6つの要素が明らかになった。笑顔でコミュニケーションする能力の向上、素直に考える姿勢の習得、メリハリをつけて子どもを指導する能力の向上、協調性の向上と達成感、映像の影響力に対する実感、咄嗟の判断力と集中力の向上、である。

よく昔から、「学習を深めるには、他人に教えてみることだ」と言われてきた。小学生たちに、未知の世界である映像制作を教えるということは、結果的に自分がより深く学ぶことにつながったことが、学生の回想法の結果からわかる。

笑顔でコミュニケーションする能力の向上は、大学生のコミュニケーション能力の向上につながっている。子どもたちには、子どもの目線で、

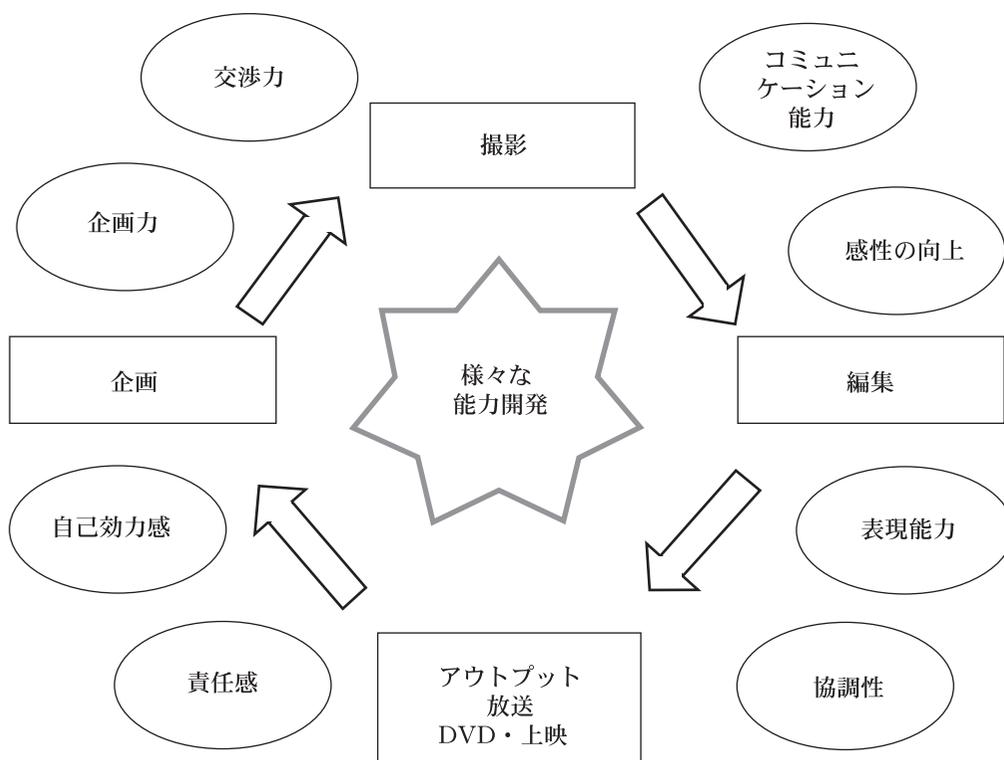


図1 映像制作活動と能力開発の関係図

笑顔で話しかけることが重要であることは、頭ではわかっている。大学生たちは、時間内に映像作品を制作し上映会までこぎつけられるのかという不安を抱えている。そうした極限状態にありながらも、子どもたちに笑顔で接することは至難の業である。しかし、笑顔で接しなければ、小学生たちは心を開いてくれないし、信頼関係は生まれないのである。

TAを務めた大学生のその後に注目すると、やはり他の大学生よりも、就職の面接がうまくいったケースが多い。どんなに緊張していても、どんなに不安な状況にあっても、笑顔でコミュニケーションをとるという経験、トレーニングをした大学生の社会人基礎力は強いといえるだろう。

素直に考える姿勢の習得は、子どもたちから「なぜ」を連発され、自分が良くわかっていない部分があったことをうかがわせる。「なぜ」なのか、「なぜ」撮影はこうするのか、など、普段は理由を考えずに映像制作を行っている大学生たちにとって、鋭い質問だったに違いない。子どもには、曖昧さは通じないということを知ったようだ。

メリハリをつけて子どもを指導する能力の向上も、リーダーシップを養う上で重要である。子どもたちは飽きやすい。自分の出番がないと、すぐに関係ない行動を取り始める。このため、TAは担当をうまく子どもたちに割り振ったり、笑わせたり、移動したり、注意を喚起したりと、メリハリをつける必要がある。そしてそのプロセスの中で、子どもを子ども扱いするのではなく、1人の人間として扱うことが大事であるという認識を獲得するのである。

協調性の向上と達成感も重要である。普通の大学生活では、自治体や小学校が関係する地域プロジェクトを任されることはない。一つのプロジェクトを、大学生、小学生がいっしょになって作り上げていく作業をこなし、2日目の昼過ぎには上映会を開催する。大学生も小学生も追い込まれるのである。だからこそ、終了した時の達成感は大きいものがある。

映像の影響力に対する実感は、最後の上映会で、爆笑されたり、涙を流される父母や観光協会のスタッフの姿を目の当たりにするからだと思われる。小学校の閉校を追ったりレポートなどでは、その小学校を卒業した地域の人々が感極まって涙を流された。「漁火想」のレポートでも最後に水中花火の映像とテーマソングが流れると、スタッフの方々はそれまでの苦労を思い出して目を真っ赤にされるのである。そうした光景を見ると、映像は情緒を伝えるメディアであり、聴衆に大きなインパクトを与えるのだということを再認識するのである。

咄嗟の判断力と集中力の向上は、2日間で上映できるレベルの映像作品を制作しなければならないという大きなプレッシャーの中で、否応なしに養われる。普通の大学生活では、それほどのプレッシャーは受けない。しかし、上映会には小学生の父母だけでなく、一般の住民が多数参加する。それが事前にわかっているため、映像制作のプロセスでは、集中力は高まり、現場でのアイデアや咄嗟の判断力も向上する。

上映会で感動して涙を流すのは、地元の観客だけではない。TAを務めた大学生も、安堵感と嬉しさが入り混じって涙を流す。上映会では、映像作品を完成させた子どもと地域の人々の温かな交流に触れる場面が多々ある。大学生は小学生と撮影や上映会をともにし、様々な年代の人々と心の交流を交わせる。その点においても、映像制作活動には大きな教育的効果があるといえる。大学に閉じこもり、同年代としか交流しない大学生が、地域社会で年齢の違う世代とコミュニケーションをとり、生きた知識を獲得し、地域住民と信頼関係を築いていく。そのプロセスは、小学生のみならず、大学生にとっても、大きな教育的効果があると思われる。

#### 注

- 1) 「総務省(放送分野におけるメディアリテラシー)」[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/joho\\_tsusin/top/hoso/kyouzai.html](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/top/hoso/kyouzai.html) (2012年1

- 月 10 日アクセス).
- 2) 松野良一 (2003) 『総合的な学習の時間のための映像制作マニュアル』田研出版, pp.12-22.
  - 3) 松野良一・大塚彩香 (2008) 「映像制作活動でどんな能力が開発されるか? メディアリテラシーの概念を超えて」 『総合政策研究』 16, pp.51-64.
  - 4) 澤木香織・松野良一 (2009) 「映像制作活動によって開発される能力に関する研究: KJ 法と因子分析法を用いて」 『総合政策研究』 17, pp.69-81.
  - 5) 松野良一 (2009) 「メディア漂流 番組制作と能力開発 大学で映像制作を教える意味はあるのか?」 『調査情報』 499号, 7-8月号, pp.84-87.
  - 6) 埼玉県川口市の Skipcity サイト <http://www.skipcity.jp/> (2012年1月1日アクセス).
  - 7) FLP とは「ファカルティ・リンケージ・プログラム」という, 中央大学で2003年度から導入された新しい教育システムだ. 通常の学部で行われるゼミとは異なり, 全学部から希望する学生を募り選抜試験を経て構成される. 今回, 番組を制作する FLP 松野ゼミは, 文学部, 法学部, 経済学部, 商学部, 総合政策学部, 理工学部の6学部の学生で構成されている.
  - 8) 「子ども放送局」では, 小学生・中学生が自ら企画・撮影・編集の作業を行い, 番組(映像)を制

作する. これまで教室で行われていたメディア教育とは違い, 地域に根づいた番組を作ることで実践的にメディア, 郷土について学ぶことができる. 完成した作品は, CATV(ケーブルテレビ)で放送, Web で配信されるほか, 上映会を実施して, 多くの人に見ていただく. この一連の作業を中央大学 FLP 松野良一ゼミの学生が TA(ティーチングアシスタント)としてサポートしている.

#### 参考文献

- 川崎市「映像のまち・かわさき」推進フォーラム (2010) 『平成22年度映像教育報告書』
- 田中里奈 (2011) 『若狭高浜子ども放送局活動報告書 (2011年度)』中央大学 FLP ジャーナリズムプログラム松野良一ゼミ (未公開)
- 松野良一編著 (2011) 『デジタル時代の人間行動』中央大学出版部

#### 参考サイト

- 「子ども放送局」 <http://blog.kodomotv.net/> (2011年9月30日アクセス)
- 「多摩探検隊」 <http://www.tamatan.tv/> (2011年9月30日アクセス)